

戦国時代と化した大相撲  
～五月場所観戦印象雑書き～

先頭を走る集団がコロコロと負け続けて、遂に千秋楽の結びの一番で優勝が決まるという展開になり、ことによると優勝成績は 11 勝 4 敗かと懸念される状態になった。しかも、おおかたの識者が「近付いてはいるが今場所ではないだろう」と読んでいた「新大関誕生」も確定的になってしまった。「優勝争い」というドラマ鑑賞や「新しいヒーローの誕生」の騒ぎだけを楽しむ人には面白い場所だったのかもしれないが、一歩下がって冷静に見ると色々課題を感じさせる場所だった。

< 1 > 白鵬不調

混乱の今場所は初日の白鵬・逸ノ城戦に始まったと言っても過言ではないだろう。逸ノ城の相撲ぶりから見ても大きな進歩は感じられないので、「逸ノ城が勝った」と言うよりも「白鵬が負けた」と言った方がぴったりするような相撲の流れだった。初日の土俵に立った白鵬を見て、胸の筋肉と腹の張り具合が今一つという感じで、十分に稽古が積まれたという印象を感じなかった。これまでのような自然な動きの中での足と腰の移動の滑らかさがなかったし、叩きやいなしに泳ぐ場面も目立った。後半の相撲の中では、右の肘を曲げたまま相手の胸に当てて体で圧力をかける場面がいくつか見られたので、肩か肘に故障があつて差すことも上手を取ることも控えなければならない状況があるのではないかと感じた。

白鵬が強すぎれば面白くないし、弱すぎても面白くないという相撲ファンのわがままな感想が飛び交った場所だった。これが強い横綱の崩壊の始まりとなるのか、再復活のきっかけとなるのか、来場所の土俵が楽しみにになった。

< 2 > 大関への勤務評定

大関は三人いるが、まともに勤めあげたのは稀勢の里だけで、琴奨菊は負け越しで豪栄道は辛うじて勝ち越しはしたが途中休場という相変わらずの惨憺たる状況。

白鵬が初日に負けてくれたので、稀勢の里あたりが「よし、やったるで！」となれば面白かったのだが、腰高の力相撲が目立ち「これが稀勢の里の魅力」と思えば良いのだが、不満が残る結果となった。しかし、この腰高で肩に力が入った相撲でも 11 勝できるのだからかなりの実力者であることは確かである。

琴奨菊・豪栄道についてはコメントのしようもない。大関昇進の折に懸念した通りの結果になっているような気がするのだが、相撲協会は「昇進させた責任」を感じているだろうか。

また別な観点で大関を大雑把に分類すると「横綱を目指せる大関」と「名大関の名を付けたい大関」と「大関の地位を守るだけで精一杯」の三つに分けられる。この下に「大関にすべきではなかった」という分類もあるのかもしれないが、一般企業で言われる「人材育成策」と昇格制度と降格制度を合わせた「人事制度」の両輪が相撲協会にも必要な状況にあるような気がする。

< 3 > 新大関誕生にあたって

先々場所東前頭二枚目で 8 勝 7 敗・先場所東関脇で 13 勝 2 敗（準優勝）・今場所東関脇で 12 勝 3 敗（優勝）、照ノ富士は最速で大関昇進を勝ち取る形になった。「直前三場所で 33 勝以上」という規則ではないが慣習化している条件をあてはめて語る人もいたり、「先々場所の 8 勝 7 敗が気になる」という人がいたり、「二場所連続して優勝またはそれに準ずる成績」だから当然と言う人がいたりで面白い。明確な規定を作らぬままにまた新大関の誕生を迎えてしまったという感は否めない。

先例も配慮に入れれば、「準優勝・優勝の連続で関脇を通過」は評価せざるを得ないだろう。厳しい指導で有名な伊勢ヶ浜部屋の所属で、基本技術を叩きこむ師匠（元横綱旭富士）はもとより日馬富士・安美錦などの巧者の指導を受けている。ここ数場所の相撲を見る限り、師匠と先輩両力士が基本技術の指導にかなり力を入れていることと、本人がそれを素早く自分の物にした感じがうかがえた。間垣部屋から伊勢ヶ浜部屋へ移籍したことがプラスの効果をもたらした。

横綱三人はモンゴル勢、大関にモンゴルからの新風と日本人三力士、その次をうかがう力士の中に顔を出す日本人力士は・・・・・・、ちょっと心配の種は尽きない。

#### < 4 > 三賞のあり方

「敢闘賞は照ノ富士・技能賞と殊勲賞は該当者なし」ということになったが、こやや疑問が残った。照ノ富士の活躍は敢闘賞ではなく殊勲賞ではなかったのか？これはあまり議論の必要のない疑問点である。敢闘賞を授与する価値のある力士が他にもいたような気がする。東前頭 11 枚目魁聖、腰を下して前へ進むことに徹して相撲を取り続けて 11 日目まで 10 勝 1 敗で白鵬と並走する形となった。後半戦で上位力士と当てられて 10 勝 5 敗に終わったが、内容的には充分評価に値するのではないか。東前頭 10 枚目勢、自分の相撲の型が出来上がりつつある復活ぶりで 10 勝 5 敗、地味ながら健闘した嘉風や宝富士、怪我による大陥落から這い上がって西前頭筆頭にカンバックして 9 勝 6 敗をあげた栃の心などなど。けれん味のないしかも基本技術に忠実な技能相撲を見せてくれた力士として宝富士、勢などがあげられるが、技能賞には選ばれなかった。

三賞は相撲記者クラブの選考によるものであるが、その場所のスポットライトを浴びた部分だけを取り上げて騒ぐテレビ番組のような選考のしかたではなく、相撲界の継続的な発展に寄与するような視点で幅広い視野を持って吟味戴く必要があると感じた。

#### < 5 > 三役昇進を狙う力士達

新三役を目指して苦勞している宝富士・佐田の海、徳勝龍などなど。再びその座に戻りたいと虎視眈眈その機会をうかがう安美錦・豊ノ島などなど。そして、一瞬の間隙をついてひとつふたつの勝ち越しを経て昇進する。昇進しては陥落し、陥落しては再昇進を繰り返すうちに力を付けて行く。その結果何人いや何十人に一人の関門を潜り抜けて関脇に上がり、さらにその上を目指して行く。

ワンチャンスをもたして昇進する力士が騒がれるが、そうした力士がすべて高い位置に座れるとは限らないし、高い位置に座ったとしてもその座で活躍を持続できるかどうかはわからない。

前頭上位にいる力士達の活躍ぶりが、相撲を見る面白さの大半を占めると言っても過言ではない。最近の三役昇進力士の状況を見て、また照ノ富士の大関昇進を見て、色々感ずるところが多いし、それゆえにこのあたりの力士達の活躍ぶりから目を離すことはできない。

#### < 6 > 四股名のありかた

古来力士の四股名は、その出身地をイメージする名前、部屋に代々伝わる名前、力強さを誇示するような名前などを中心に「日本人ならではの感性」が感じられる美しいものが多かった。

出身地にまつわる四股名としては清水川・常陸山・安芸の海などが知られた名前であるが、現在の幕内力士では隠岐の海ぐらいになってしまった。部屋に代々伝わるものは、その部屋から生まれた名力士や部屋の創設者の名前に由来するものが多く、春日野部屋の「栃」や佐渡ヶ嶽部屋の「琴」などがある。長い歴史の中で相撲部屋が合併したり消滅したり誕生したりした結果、数十年前まではメジャーだった名前が今では希少価値になってしまったものもある。強さを誇示する四股名として、昔は稲妻、雷電・大砲（おおづつ）などがあったが、現在では荒鷲ぐらいだろうか。

かたや「読めない四股名」がやたらに多くなってきた。

日馬富士（はるまふじ）、日を「はる」と読む習慣はないので素直に「はるまふじ」と読むことはできない。臥牙丸（ががまる）、ニックネームを文字ってつけた名前らしいが、当て字に頼りすぎて美しさに欠ける。阿夢露（あむーる）、出身地を当て字で表現したつもりだろうが、露を「る」と読ませる習慣はない。十両には阿炎（あび）という新鋭力士が登場した。炎を「び」と読むのことは通常ではありえない。殆どの人が「あえん」と読んでしまう。北礪磨（きたはりま）に至っては相撲協会のホームページ上でも文字が出せず「北はり磨」という表記になっている。

四股名についてどのような決まりがあるのか知らないが、いささか常識から逸脱する傾向が感じられる。四股名には美しさや優雅さは必要だと思う。相撲協会が「管理不在の組織」であるような気がしてならない。

以上